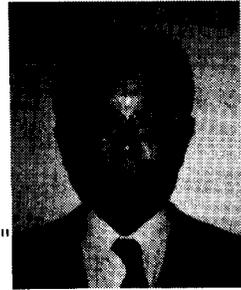


大人の学会へ

日本オペレーションズ・リサーチ学会 副会長 本告 光男



みなさん明けましておめでとうございます。

昨年も産業界には種々なことがありました。貿易摩擦、不況、円安に代表されるような年であったと思います。どれをとっても早急に解決されるような問題ではありません。しかし、今年は少しでも好転して欲しいと思います。

さてOR学会ですが“理論と実施とは車の両輪である”とか“むずかしい理論に走りすぎて役にたっていない”などの学会の在り方についての論議が、昨年は特に多く聞かれたように思います。

電気関係東海支部研究発表会が11月豊橋技術科学大学で開催されましたが、私も実行委員になっていましたので久しぶりに参加しました。その時の特別講演は、同大学の学長榊米一郎先生の“開かれた大学”というお話でした。その主旨は、企業からも教官を採用し、さらに企業の推薦する社員を一定のルールで修士課程や博士課程に入学させ、将来は生涯教育の場としても開放していくというものであったと思います。感銘を覚えました。社会人は知識の更新と追加補給を必要とし、一方、研究者も社会のニーズを知る必要があります。すばらしい試みであると思いました。

また、12月号の真壁先生の 記事は私も同感であります。理論の研究は、それがただちに産業界で利用されるものではなくても、それらの積重ねが新しい実践的な手法を生み出していくものであれば、重要な仕事であります。また、ORの解析結果は背景に理論の裏付けがあるから説得力もあります。

しかし、一般の職場からORを見ると、やはり近寄り難い存在であることも事実であります。問題意識はあっても、ORの本はむずかしくて部厚いし、明日の仕事には役にたたない、という声をよく聞きます。つまり、理論と実際をつなぐシャフトが無いのです。

昨年はQCの年であったとも言えます。製品の品質を向上し、日本の経済を今日あらしめた功績が取沙汰されました。しかし、これから日本がさらに生きのびていくためには、これらの成果を総合化する問題、固有技術だ

けでは解決できない問題など、日常の仕事として処理していく必要があります。そのためにはORは最も有力な技術であると思います。ORを職場に定着させ、QCがそうであるように会社ぐるみで実施する手法が必要であると思います。つまり、これだけ知っていれば理論的な背景は知らなくても、大方の問題は対処できる、というものが欲しいと思います。

これが、車の両輪をつなぐシャフトになるのでしょうか。OR学会は質的に高いレベルにあり、能力ある学会であります。いかにも惜しいと思います。日本経済の発展のためにも、今年はこの種の研究もあって欲しいと思います。OR学会も今年は26才になります。大人の学会としてバランスのとれた成長を望みたいと思います。

日本OR学会役員

会長	横山勝義
副会長	三根 久, 本告光男, 渡辺 浩
庶務理事	川野幸三郎, 今野衛司, 若山邦紘
会計理事	伏見多美雄
研究普及理事	古林 隆, 平本 巖
編集理事	小林竜一, 刀根 薫
国際理事	高森 寛
無任所理事	飯田徳雄, 飯原慶雄, 権藤 元
監事	阿部 統, 宮川公男

日本OR学会支部長

北海道支部	紺野功一
東北支部	遠藤市彌
中部支部	本多波雄
関西支部	秋葉 博
中国四国支部	青木兼一
九州支部	須永照雄